

尿路感染症の原因菌

小児の尿路感染症の原因となる菌は、これまでの調査でも大腸菌という菌が70～80%と最も多く、この傾向は近年も変わりません。大腸菌はその名の通り、人間の大腸の中など自然界に数多く存在する菌です。大腸菌以外にも腸球菌などの菌でも尿路感染症が起こりますが、頻度の少ない緑膿菌や複数の菌が認められた場合には、腎尿路異常が合併している可能性があるため画像検査などが勧められます。

また近年では、抗菌薬が効きにくい菌（耐性菌）が様々な分野で問題となっています。対策としては、検査でどのような菌なのかを正確に調べて、適切な抗菌薬で治療することが大切です。検査の前に抗菌薬などを使用していると、尿検査で菌がわからなくなってしまう場合があるので注意が必要です。

表1 上部尿路感染症 427 例の起炎菌

起炎菌	例数(%)
<i>Escherichia coli</i>	315(73.8)
<i>Enterococcus</i>	25(5.9)
<i>Klebsiella</i>	22(5.1)
<i>Proteus</i>	13(3.0)
<i>Pseudomonas</i> *	12(2.8)

*：12 例中 11 例が複雑性 UTI.

(豊浦麻記子, 他：日児腎誌 14：121-128, 2001 より)